

新潮文庫

落城・足摺岬

田宮虎彦著



新潮社

落城・足摺岬

定価 120 円

新潮文庫 草 85 A

昭和二十八年九月五日 発行
昭和四十一年十一月十日 二十六刷改版
昭和四十四年二月二十八日 三十刷

著 者 田 宮 虎 彦

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京二六〇局一一一(大代)
振替 東京 八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

新 潮 文 庫

落 城・足 摺 岬

田 宮 虎 彦 著

新 潮 社 版

目次

落城	七
末期の水	五三
かるたの記憶	七七
天路遍歴	一〇五
土佐日記	一三五
絵本	二〇一
足摺岬	二三五

解説 石塚友二

落城・足摺岬

落

城

慶応四年十月十六日、仙台にあった奥羽追討の西国勢主力について北上の動きがみえた。前日幕府方軍艦捜査を名として石巻より北上した土佐、肥後、津和野三藩連合二枝隊七百の兵と呼応するうちに、この日辰の刻薩摩安芸二藩連合三百五十、薩摩佐土原二藩連合五百六十の二枝隊が仙台を発ったのである。

黒菅藩首席藩老山中陸奥は、その報せを黒菅城本丸西溜りの藩老番所で聞いたが、聞きおわる一瞬老いた頬に淋しい自嘲のような笑いをうかべた。いよいよという諦めが陸奥の心にかげおちたからであった。すでに会津も落ち庄内も破れていた。閏四月十九日、奥羽鎮撫参謀長州藩士世良修蔵を福島の新倉に斬って、白石城に結盟した奥羽越列藩同盟三十一の諸藩は、十月九日の盛岡藩降伏を最後として、黒菅一藩をのぞきことごとく薩長官賊の軍門に降ってしまった。破竹の勢いとはこのことだが、その敵勢を迎えて、徳川譜代最後の血戦をいともうとしている黒菅二万三千石の戦いが、螳螂の斧のはかないあがきにすぎないことは、陸奥の胸にも火をみる程にあきらかなことであった。陸奥の皺よった頬から一瞬の笑いが消え去ってゆくと、やがて老いて濁った眼に深い悲しみに似た淀みが沈んで来た。

黒菅城内は長槍や鑢を研ぐ砥の音が、火薬を練りあわす硫黄くさい匂いにまみれていた。その音を耳に追いながら、陸奥は昨夜死んだ山中左膳、鈴木鼎、堀江真琴らのことを思いうかべてい

た。昨夜まで陸奥はひそかに恭順のことを考えつづけていたのである。すでにおそいことであつたにしても藩主を救うことの出来るのは薩賊への恭順の外はなくなっていた。城内に満ち満ちた官賊への罵声ばせいの中で、八十三歳の老いた陸奥をかこんで藩老山中左膳、江戸在勤藩老鈴木鼎、御旗奉行堀江真琴、御勘定奉行勝田三右衛門の四人が、滅び去った徳川幕府にあくまで殉じようとする藩主和泉守いずみのかみ山中重治の意をひるがえそうと心を砕いていたのであった。だが、それもすべて昨夜までのことであつた。

石巻にあつた土佐、肥後、津和野の藩兵七百が、三春藩の兵を先導に北上川沿いに柳津に向つたという報せしらせがついたのは、昨夜西の下刻げこくのことであつたが、その直後の戌いぬの刻には、山中左膳、鈴木鼎、堀江真琴の三人が、御近習頭鈴木主税ちから、剣術御指南役山崎剛太郎以下に斬られていた。陸奥、三右衛門の二人は城中西溜りにいたためわずかに難を免れたが、陸奥のいだいていた恭順のことはその時破れ去つたのであった。陸奥とても戦いたかつた。薩賊の意を迎える恭順などという卑屈は陸奥もとりにくたないのであつた。だが、武士の名をはずかしめ、徳川恩顧にあるまじい恭順をあえてせねばならぬ窮地に追いこめられていたと陸奥は信じていた。藩主重治の生命さえ助けられれば——それが陸奥の恭順についての最後の願いであつたわけである。だが、すべては終つたのだ。

十七日、古川、小牛田こぶたに進んでいた先鋒せんぽうの二枝隊を追つて、奥羽追討総督九条道孝以下五千有余の西国勢が、寅とらの下刻仙台を發つた。九条総督の本営は申さるの刻三本木にいたつたという。

この日まで、やがては西国勢に黒菅の城がかこまれるとしても、陸奥はまだ一脈の明るみを心の底に残していた。それは黒菅のごとき辺陲へんすいの小藩に、西国諸藩の兵が主力をあげて攻め寄せることなどあり得まい、というはかない望みであった。せいぜい二三千の弱兵が仙人沼、赤石の街道口をおびやかすにすぎないだろう。とすれば、黒菅藩が城をあげて戦えば、三旬四旬の間はこれを支えることが出来る筈だ。たとい西国勢が元込銃もとごめじゅうライフル砲の備えをほこっているとしても、土民をも加えているという烏合うごうの敵勢に一矢をむくことも難くないであらうし、十一月半ばまでこれを支えることが出来るとすれば、北国の黒菅盆地は深い雪におおわれてしまうのである。寒冷になれぬ西国勢が攻めあぐむことは必定であった。恭順の機会もまたおのずからつかみ得よう。陸奥はそう考えていた。だが、そうした陸奥の期待はすべて裏切られて、雲霞うんかの大勢が旗鼓堂々と黒菅に迫って来るのである。火繩銃ひなわじゅう二百六十挺、旧式百匁大筒おおづつ二門、足軽以下には充分な刀槍とうそうもない黒菅藩が、果して幾日を支えることが出来ようか。陸奥はもう淋しい笑いすら頬にうかべることが出来なかった。城内ではそんな陸奥の心をよそに、藩士たちが本丸広間にひしめきあって火のように軍議を闘わしあっていた。

十五日の夜半から降りはじめた雪は、霰みぞれまじりとなって十六日夕刻には降りやんだが、重い雪雲が盆地に垂れこめ、薄氷のはりつめた刈田の上を、時おり刺すような北風が吹きすさんですぎた。黒菅城は背に雪笹山を負っていた。屏風岩びょうぶいわが屹立きりつしていて、しかも山背には瘴氣しょうきのゆらいでいる沼沢しやうたくがつづき、けものさえ通らぬ峻けわしい山だが、その雪笹山から盆地をかこんで、東に赤石

峠、南に折れて鷺合、天人の二つの山、西にのびて、鳩の巢、横笛、鬼場の三つの峰が起伏して、さるなきやま猿啼山につらなり、その山裾に雪笹川が激湍をほとぼしらせている。対岸は鉢甲の山塊となり、鉢甲の丘陵から雪笹山の西につづく仙人沼峠となるのだが、盆地を圍繞するこうした山々にもやがては淡い雪が薄化粧をこらしはじめる頃になっていた。

十八日、石巻から北上川ぞいに北上した土肥の藩兵は米谷から海ぞいに出て、気仙沼から飯森峠を越し、奥州街道の薩芸連合の枝隊は一関に進んで、狐禅寺の黒菅藩飛地を襲っていた。そうした敵勢が数日の後には、赤石峠から鷺合、天人、さらに猿啼、鉢甲の山々をへて、仙人沼峠にいたる三日月形に黒菅の城に迫って来ることは明らかであった。そうした山々の攻め口の中でも、仙人沼、赤石の二つの街道攻めと鉢甲の山攻めとは、西国勢主力が殺到して来ることであろう。そして、また、鷺合、天人の山合いの間道、雪笹川の激湍にそった溪谷、さらに今一つ鬼場山のはげしい曲折の山径を辿るこうした峻しい山攻めも、会津を攻めた西国勢の攻め手として覚悟せねばならぬところであった。

この日中の刻にはそうした敵勢への備えもきまった。軍議は鉢甲山に黒菅藩の主力を備えることになった。鉢をふせたような山塊がつらなりあっている鉢甲山は、十数里の山裾をひいて奥州街道の厩沢尻の町までのびている。多勢をたのんで攻めよせる西国勢が、仙人沼、赤石の峠攻めより鉢甲の山攻めをえらぶことは必定と思えた。黒菅藩では鉢甲山にすでに六カ所の砦をきずいてある。その六カ所の砦にはさらに土囊をきずき壕を掘った。首将には藩老山中重徳、参謀には鈴

木主税、山崎剛太郎の二人が選ばれ、ほか二百三十七人、いわば藩の精鋭をすぐってこの鉢甲の固めにあたるわけである。大筒一門と鉄砲百五十挺がこの備えに配置された。仙人沼峠の固めには御勘定奉行勝田三右衛門を首将に、参謀横沢祐之進以下百三十三名があたった。大筒一門鉄砲七十挺が配置された。鉢甲山についての藩の主力である。

赤石峠には御物頭今泉史信、御徒頭服部英秋以下百十五名、鉄砲五十挺。鷲合、天人の間道には御目付吉井賢之助以下七十五名、鉄砲二十五挺。鬼場山には御用人鰐沢三郎以下四十名、鉄砲十挺。雪笹川沿い猿啼山間道には御物頭鶴見正人以下八十名、鉄砲二十挺。城内には山中陸奥以下僅か三十八名の手兵が残るわけであった。

鹿柴、逆茂木、陥穽、黒菅にある限りの備えは出来上った。今は十数里の彼方に迫った敵を待つばかりである。出来秋の新米はことごとく城内の兵糧庫に収め、土民はすべてすでに熊坂、白木、五十沢、倉谷の山間の部落に避難させてあった。

陸奥は小姓の長十郎をつれて天守に上った。野の涯まで静まりきっている。殺気だった鹿柴などが遠い山峽にまで伏せられているなどとは、到底思えない死んだような静けさであった。陸奥の心の静けさもやはりそのように死人の静けさに似ていた。二三日の寒さがなごんで、弱い冬のひざしがもれていた。風もないで、その日溜りに陸奥はかすかな安らぎを感じた。すると、ふいに、奥羽同盟が結ばれて再び召し出された三月前からの出来ごとが、走馬灯のように陸奥の心によみがえって来た。白河口がやぶれて、奥羽同盟勢に援軍として出ていた藩の御長柄奉行山中重

次郎ほか四十三名が斬死した報せがついた時も、陸奥はまだ戦いがこのようにおしつめられようなどとは思ってもみなかったのだ。夏が急ぎ足に去って、今嶮しい殺気をひそめている四辺の山が真赤に紅葉を散らした頃も、なお陸奥は負け戦さを信じなかった。今も城内では慶応という旧い年号を用いている。しかし、仙人沼峠を越せば、もはやそんな年号は消え失せてしまっていた。すでに明治という年号にかわり、江戸も東京とかわっていた。

十九日、奥州街道ぞいの薩芸の先登隊は、すでに水沢の町をすぎ厩沢尻にむかっていた。二番枝隊も狐禅寺にはいって、長坂、摺沢から高田街道をうかがっているという。飯森峠を越した土肥の兵は赤石の南五六里の鮫浦についていたし、おくれて仙台をたった総督九条道孝以下の主力も十二枝隊に編成され、三段構えの布陣を示しながら奥羽街道を一関に向っていた。枝隊ごとに錦の旗が風になびき、鼓笛のひびきが会津に攻めいった時と同じように澄んだ冬の空にひびいていた。そうした敵勢の噂が伝わるごとに城内には藩士たちのどよめきがまきおこるのだった。西国勢を罵る声にまじって、土肥津三藩の兵を先導して赤石に攻めすすんで来るといふ三春勢へのはげしい憎しみの声が、土囊を城壁にきずいたり、火繩銃の錆を研いだりしている藩士たちの口々に罵りかわされた。一人も生かしてかえさぬ、たとい西国兵に己れの生命を絶たれようと、その前に三春兵の一人は必ず血祭りにあげてみせるといいあうのだが、それは白河口で寝返りをうった三春兵のために背後をつかれて、ことごとく無残な斬死をした山中重次郎以下四十三名を悼む声であった。夜にいった冷たい北の風がまたしきりに吹きすさびはじめた。

二十日、城内では巳の下刻から無礼講の酒宴がひらかれていた。藩士たちは、まず藩の鎮守黒菅神社並びに黒菅弁天の前に武運の加護を祈り、ついで藩主重治直々の盃をうけた。藩主の眼にも藩士たちの眼にも涙が光っていた。四十五歳の重治の白い豊かな頬にはかすかに青黒い影が落ちていた。藩士たちは席次に従って盃をうけてゆくのがあったが、近習藤田源之介が重治の前に進み出た時、藤田は盃をさし出している重治の手にとりすがってむせび上げた。

この藤田源之介は笙がたくみであった。重治は源之介のその笙を好んで、軽格の同心からぬきんで御近習番二百俵にとりたてたのである。その恩義を思う心がまだ二十三歳の源之介の心に制しきれなかったのであろう。慟哭が源之介の咽喉をつき、涙が頬に流れた。順次を待つ藩士が溜りにとどこおった時、重治はその源之介の肩に手をおくと、

「源之介よ、なくな、手柄を待っているぞ」

といった。驚合、天人の間道に源之介の部署は定められていた。

藩士への賜盃は未の刻に終わった。短い冬の日差しが黒菅の城をとりまく冬枯れの山肌に淡い残映をそめていた。御庭方の小者が城内の整の間を箒ではいている。箒の目のあとが扇形にうつくしく形づいているのだが、こんなことが今は何になろうか。だが、小者は三十年以前に仰せつけをうけたまま、今日も昨日に同じように城内をはききよめている。明日も同じように掃いていることであらう。明後日も、そして、その次の日も。しかし、それ以後の日はもはやわからぬ別の運命にさらされているのだった。この年老いた小者も勤め終って番小舎に帰ってくれば、竹槍

に種油を焼きつけているのだった。その竹槍で幾人の敵をつくことが出来ようか。

広間からは酒に酔った藩士たちの黒菅節がきこえて来ていたが、やがて、これらの藩士たちも武家屋敷にさがっていった。これが最後の下城であり、明朝あつぎよう弘暁の登城にはすでに腹当脛楯はいだてに身をかけた身体なのだ。帰ってゆくわが家では妻子が威儀を正して待っていることであろう。最後の別れのために、藩庁からは人数ずつの鰯あじの干物と一瓢びようの清酒がさげわたされていた。

陸奥も熊坂村の別荘から老妻のいく子をよびよせてあった。四囲の守りのどの一角がくずれても、武家屋敷の妻子たちはすべて黒菅城にたてこもることになっていた。その報せは太鼓櫓たいこやぐらの乱打で知らされることになっている。陸奥は長十郎をつれて、このたびのお召しで登城してからはじめての家路をたどった。せきとめられた濠ほりの水は清冽せいれつな雪笹山の流れ清水を満々とたたえていた。厚い氷のように冷たくすきとおっているその濠の底には鯉が一尾泳いでいた。今日の酒宴に濠の魚は一尾残らず網ですくい上げられた筈であったのに、その鯉はそんな周囲の悲劇もしらぬ気に静かに尾鰭おひれをうごかしていた。陸奥はしばらく足をとめてじっとその鯉をみつめた。運の好い奴め、そう心につぶやいてみたが、ふと心につまずくものがあった。奴は運がいいのであろうか。黒菅藩士一人として生き残るものがない筈である。果して一人も生き残るものがないだろうか。刺すような痛みが陸奥の心をついた。

陸奥はふりかえって、

「長十郎よ」